



## 可能性を信じる教員をめざして

ミラノ・コルティナ冬季オリンピックが、様々な白熱した競技が、連日繰り広げられています。そして、選手の競技人生の背景もまた、連日報道されています。皆さんはどのような競技に注目していますか。

雪上競技、氷上競技がこのように多種多様なものとは、知らずにいたのに、にわかファンとして楽しめているのには理由が、いくつかあります。

- ①スノーボードやスキー競技を上空からその高さや回転、選手を追いかけそのパークの硬さや滑降するスピード感を伝える音声などドローンの技術がいたるところで発揮され、競技を身近に楽しめます。
- ②解説者と実況が、見事にかみ合うことにより、視聴者の感情を増幅させています。特に今季の話題となる解説者は、どの選手に対しても素晴らしい点を評価し、自身の感情を乗せ実況者とともに名言を繰り広げています。競技のルールや技の解説にとどまらない応援者となっていることを感じます。
- ③また、選手の背景や今の心情などの情報が、選手と同化して応援する気持ちをさらに強くしています。
- ④そして、どの選手も、競技後に口にするのは、これまで支えてくれた人たちへの感謝のことばです。

これらには、教員への示唆があふれています。

まず、①は見える化、②は共感、③は観察・見守り、そして④は可能性を信じる姿勢です。

フィギュアスケート ペア りくりゅう（三浦璃来・木原龍一）がショートプログラムで、彼らの得点源となるリフトにおいて、今までしたことのない思いもかけない失敗をし、5位となりました。木原龍一選手は泣き崩れ、「これで終わった」と失意の底に落とされました。しかし、翌日のフリーでは世界最高得点を獲得し、見事逆転優勝しました。ショートプログラム後、フリーの直前まで涙が止まらなかった彼が、「どのように気持ちを切り替えたのか」、共同通信社の各国の記者からの質問が集中しました。

**「正直、SPが終わったあとは絶望的でした。もう絶望しかなかった。心が折れてしまっていた」とリフトの失敗により、まさの5位に終わったSPを振り返った。団体での高得点による銀メダル獲得で勢いに乗りたかったが、重圧もあった。それでも「コーチの方から『野球は9回裏3アウト取られるまで試合は終わらないんだ』と。諦めるなという意味で、すごく勇気づけられましたし、みんなが僕の心を立ち直らせてくれた。チームの力は大きかった」と気持ちを切り替えた。（木原龍一選手 談）**

「野球は9回裏から」はある意味使い古されている励ましの言葉です。しかし、この使い古されたことばが彼の心に響いたのはなぜだと思いますか。それまでの彼との時間（共感し、観察・見守り）があり、本気で信じている、信じ切っているからではないでしょうか。

どのような努力をしても、必ず報われるわけではありません。でも努力しないで報われることはないのです。実績・経験を積み重ねた選手でさえ心が折れる時があり、それを乗り越えさせるのは人のことばでした。

皆さんが教員となった時に、目の前で悩む生徒、心折れている生徒にかけることばはありますか。

皆さんの経験値の中にとどめず、情報の中でも、人を動かす大切なことばを蓄積してください。素敵なことばも、タイミングを逃しては効力を発揮しません。“ちょっと待ってて”はナシ！

## イベントについて

- ☆ アナウンサー大橋照子先生による話し方講座 2月25日（水） 13:20～17:00  
対象 2年生 3年生 まだ空きがあります。人を惹きつける話し方は就活にも役立ちます。
- ☆ 次年度教育実習実施者向け「教育実習事前講義」3月25日（水） 3限